

大学生の学習モチベーションに現代のライフスタイルが与える影響

Analysis of the Motivation to Learn within the Modern Lifestyle for the Students

1541039 勝呂 祥己

Shoki KATSURO

指導教員 秋葉 知昭

In this study, I executed survey questionnaire based on the binary factors of learning motivation model. So, I analyzed results by the multivariate statistics. From the results, I found a lifestyle that it affects motivation to learn for the students.

1. 緒言

モチベーションがある事が生きる時というのは様々で、学生の学習時もその一つである。人間は子供のころの好奇心を、そのままの形ではないものの、一部持ち続けることができ、そうして持ち続けた好奇心が学習という行動につながり、それは人間だけが持っている特質なのである[1]。

しかし、高校生の時に大学受験の勉強を行っていた生徒が、大学生になってしばらくすると、大学は学生に対し高校のように世話を見る場所ではないので学習をしなくなってしまう、もしくは単位を取るために本当に最低限の学習しか行わないといった学生は少なくない。ベネッセ教育総合研究所の調査[2]によると、学生間の学力差を問題視する大学が7割近くに上っているとの調査結果も出ていることから、大学生の根本的な学力改善、学習に対する意識の改善必要だと言うことができる。

つまり、学習をする際に学習動機に影響を与えている要因は何なのか、何を变えれば学習モチベーションが向上するのかを知る必要がある。

本研究では経営情報科学科の学生を対象にアンケート調査を行い、ライフスタイルとモチベーションに関する調査を行う。

2. モチベーション概要と分析方法

2.1 モチベーションについて[3]

モチベーションとは、「元気」とか「やる気」という心理現象を実現させ、活気に満ちた行動へと駆り立てるものである。

組織心理学者の田尾雅夫氏によると、「モチベーションとは、何か目標とするものがあって、それに向けて、行動を立ち上げ、方向づけ、支える力である」[4]というものがモチベーションの定義だとしている。

2.2 学習動機の二要因モデル[4][5]

本研究では学生のモチベーションの判別に学習

動機の二要因モデルを用いた。このモデルでは表1の通り、縦軸に学習内容の重要性(内容に対する関心度合い)、横軸に学習の功利性(学習により得られるものについての関心度合い)を取り、6つの種類の学習動機を分類構造化している。

このモデルにおける典型的な内発的動機は充実志向、同じく典型的な外発的動機は報酬志向であり、充実志向から報酬志向に至る対角線の軸、これが内発と外発である。

また、上の段の充実、訓練、実用の3志向は学習内容に関与している動機なので、内容関与的動機と呼び、下の段の関係、自尊、報酬の3志向は学習内容から離れた動機なので、内容分離的動機と呼ぶことにしている。

表1 学習動機の二要因モデル

学習内容の重要性 ↑ 大(重視) ↓ 小(軽視)	充実志向 学習自体が楽しい	訓練志向 知力を鍛えるため	実用志向 仕事や生活に活かす
	関係志向 他者につられて	自尊思考 プライドや競争心から	報酬志向 報酬を得る手段として
	← 小(軽視) 学習の功利性 大(重視) →		

2.3 分析方法

アンケート調査の分析方法には、多変量解析の手法である主成分分析とグラフィカルモデリング(以下GM)を用いた。GMでは、各質問の選択肢毎に層別を行った回答データを用いて分析を行い、6つの学習動機間の偏相関係数を用いて作成した相関図に違いがみられるかを検証した。

主成分分析では、分析結果を質問毎に層別し、各主成分を軸とした散布図で、選択肢毎に違いがみられるかを検証した。

3. アンケート調査概要

本研究では経営情報科学科1年生から4年生を対象にアンケート調査を実施した。実施日は平成29年度9月18日、各学年の後期ガイダンス後の時間を利用した。アンケート票回収総数は1年生

102, 2年生 107, 3年生 97, 4年生 62 の合計 368 票であった。

3.1 アンケートについて

本研究で作成したアンケートは匿名式とし、大きく分けて2種類の質問、合計91問の質問を作成した。

学習動機の評価のための質問作成には、「勉強すること」、「教養科目」、「外国語科目」、「経営学科目」、「情報学科目」に対する考え方を学習動機の二要因モデルを基にそれぞれ「充実志向」、「訓練志向」、「実用志向」、「関係志向」、「自尊志向」、「報酬志向」の6つに分類して、合計66問作成した。これらの設問はリッカート尺度を用い、「5.当てはまる」、「4.やや当てはまる」、「3.どちらでもない」、「2.あまり当てはまらない」、「1.当てはまらない」の5段階で評価した。

層別に分析するためのデータとして25問の質問を用意した。

3.2 回答データの処理について

アンケート調査で得たデータは、学習動機に関するデータを量的変数、層別するためのデータを質的変数として扱った。また、学習動機に関するデータは、勉強することについての設問と科目毎の学習動機についての設問の合計66問を志向毎に各個人の平均値を出し[5]、その値を各志向の値として扱った。

4. 結果と考察

GM で分析したグラフにおいて選択肢別に違いがみられた質問のうち一つを図1, 図2に示す。

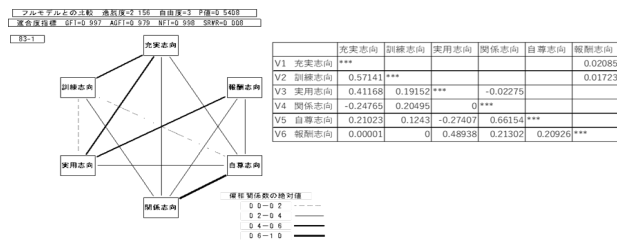


図1 「大学の講義を友人と一緒に受けている人」のGM結果

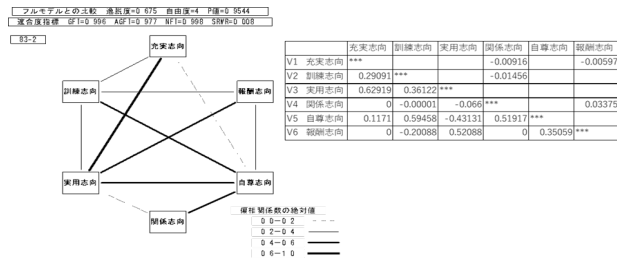


図2 「講義を友人と一緒に受けていない人」のGM結果

この結果から、友人と一緒に講義を受けていな

い人は、講義を一人で受けているため毎回しっかりと講義に参加し、一人で試験対策を行い単位を取得しないとイケないため、知力を鍛えるために訓練志向、一人で単位取得まで頑張るというプライドから自尊志向が高くなっていると考えられる。

他にも、GMではアルバイトをしている学生、家庭用ゲーム機やPCでゲームをしていない学生などに学習意欲が高いことが分かった。

また、主成分分析では、講義の予習復習を行っていない学生、留年をした学生、娯楽・交友を行わない学生のデータが、学習することに対して受動的であるということが結果から分かった。

5. 結 言

学習動機は人それぞれで、本研究の結果は経営情報科学科の学生であっても必ず当てはまるというものではなく、各個人の性格、育った環境、経験等様々な要因が絡んでくる。しかし全体傾向として、アルバイトをしている人、友達がいる人、家庭用ゲーム機やPCでゲームをしない人、講義の予習復習を行う人の方が内容関与的動機が高いという結果が出た。

自分にとって何が必要・不要で、どうすべきなのかということを理解し、情報の取捨選択をし、正しい理解をする能力を取得することが必要である。その上でこれらの結果を見て、ライフスタイルを変えることができれば、学習モチベーションの向上に大いに役立てることが可能だろう。

謝 辞

本研究を進めるにあたり、アンケート調査にご回答いただいた経営情報科学科1年生から4年生、アンケート調査実施時に御協力頂いた経営情報科学科各学年のガイダンス担当の先生方、大学職員の方々、私の友人に厚く御礼申し上げます。

文 献

- [1] 10MTV オピニオン：習うは一生、人間だけが好奇心を軸に学習できる(https://10mtv.jp/pc/column/article.php?column_article_id=1833)(2018)
- [2] リセマム：学力低下、7割以上の大学が問題視…ベネッセ調査(<https://resemom.jp/article/2014/09/17/20450.html>)(2014)
- [3] 池田光：図解きほんからわかる「モチベーション」理論、イースト・プレス(2008),
- [4] 田尾雅夫：モチベーション入門、日経文庫(1993)
- [5] 市川伸一：学ぶ意欲の心理学、PHP 新書(2012)